

遅刻3回目の“この場面”どう叱るか — 先行研究に学ぶ —

コーチングでする

叱り方技術

神谷和宏

子どもをどう叱ればよいのかが分からず、悩む教師は多いようです。

子どもを叱ることで「やる気をなくしてしまったらどうしよう」「反論される」と嫌だな」と躊躇してしまう教師も多いようです。そこで、上手な叱り方をコーチングの立場からお伝えします。

頭ごなしに叱らない

子どもを叱るには、子どものことを思い、理解することがまず第一歩です。今の子どもは家庭でも学校でも、個性を尊重されながら育っています。反面、叱られることに慣れておらず、評価されることを好ましく思わない子どもや、打たれ弱い子どもも多くいます。こうした子どもに対して、いちばんしてはいけないのが、頭ごなしに叱ることです。

多くの子どもが、自分の言い分を聞かずに突然怒り出す教師に不満をもつ

ています。当たり前のことですが、叱る際には常に子どもの言い分をよく聞くことを心がけましょう。

「コミュニケーションの「量」と、信頼関係の「深さ」は相関関係にある」とは、結局のところ、子どもにとってよくない行動があり、その行動を改善することを目指すことです。ですから、まず行動を改善することで得られるメリットを理解させることが必要です。

このメリットが魅力的であれば、子どもは意欲的に改善しようとしてくれます。反対に、メリットを感じなければ、押し付けられた・やらされた・叱られた感情だけが鬱積していきます。

例えば「乱暴ばかりすると、友達から嫌われるぞ」という叱り方は、友達や仲間が比較的多い子どもにはまったく響きません。子どもが何に喜びを感じているのかを知っていることは重要

です。そのためにも、日頃から子どもに関心をもって接し、よく見ていることが重要です。

また、近年明らかに家庭や学校内のコミュニケーションの「量」が減っています。子どもは家庭に帰ると、自分の部屋でゲーム、テレビ三昧であり、唯一のコミュニケーションツールとして、スマホやメールを愛用しています。

コミュニケーションの「量」と信頼関係は、明らかに相関関係にあります。コミュニケーションの「量」を増やせば、感情や体験の共有も増え、それに比例して信頼関係も深まっていけます。上手な叱り方につながる秘訣であると言っても過言ではありません。

叱った後もしっかりフォロー

子どもの改善が見られたら、すぐに評価しほめることが大切です。

叱るといのは本来、問題提起や改善策を検討して、子どもの望ましい行

動を促す行為を言います。つまり、叱ることがゴールではなく、行動がきちんと改善されているかどうかを確認しないと意味がありません。

また、もう一つ大事なのが、きちんと改善された内容は、「指示通りにできている」「よく頑張っている」のように言葉にしてほめるということです。子どもの中には、行った行動に自信がもてない場合が結構あります。だから、こうしたフォローはとても大切です。さらに、「何か先生にできることはありますか？」などと声をかけることができます。さらに効果が増えます。この時、教師の成功体験や解決策をもとに、ちよつとしたアドバイスのつもりが、ついつい押し付けてしまいがちに

感情を伝えるメッセージで叱る

叱る方法にはYoruメッセージとIメッセージがあります。Yoruメッセ

ージはYoru（あなた）を主語にした叱り方です。たとえば「（あなたは）遅刻ばかりしてだめじゃないか」という言い方です。それに対してIメッセージは「遅刻ばかりして先生（私）は残念な気持ちです」という言い方です。子どもによつては、Yoruメッセージを好む場合がありますが、効果が高いのはIメッセージです。それは、「先生は自分のことを心配してくれている」「期待されている」という感情が伝わりやすいからです。

叱るといふ行為は、単に改善策を提示するだけでも、行動を止めるだけのもではありません。「私はあなたのためを思っていますよ」「心配していますよ」という感情が伝わるのが大切です。

このIメッセージは、次の四つの段階に分けて伝えると感情が伝わりやすくなります。

- ① 事実を確認し、伝える。
- ② そのことにおける波及効果を伝える。
- ③ 教師の感情を伝える。
- ④ 質問をして、気づきを引き出す。

先の例で言うと、

- ①の「事実を確認し、伝える」は、「昨日も今日も続けて遅刻してしまっただね」と事実を伝えます。②の「そのことにおける波及効果を伝える」では「そんなことでは勉強にも身が入らないようになってしまつかもしれないよ」と伝えます。③の「教師の感情を伝える」ですが、「先生は学級担任として少し悲しいなあ」とか「何でも一生懸命に取り組める子になってほしい」と思っているんだなどと伝えます。そして、④の「質問をして、気づきを引き出す」では「明日からどうする?」「どう思う?」と疑問形の投げかけをします。

多くの教師は、③までの内容はスム

ーズにできますが、④は苦手のようです。問題解決を急ぐあまり、どうしても「明日はどうかするのか、はっきりしなさい!」と迫ってしまいます。しかし、ここを少し我慢して、子ども自身に気づかせることが必要です。答えを強要する代わりに、「明日からどうするの?」と質問します。子どもが自分で考え、判断させるためです。その場で答えはもらえないことがあります。じっくりと待ち、返答をせかさないうでください。万一、次の日も遅刻するころがあっても、もう一度この叱り方を繰り返してください。希にそれでも改まらない場合もあります。その時は、家庭が崩壊状態にあつたりするなど、別の事情が考えられるでしょう。

心を揺るがす叱り方

最後に、私が実際に経験した中で、非常に効果が高く、心に響いた叱り方を紹介します。特に、叱られ慣れてい

ない子どもには効果があります。それは「どうしたの? 君らしくないね」という言い方です。

この叱り方は、「本当はもつとできるはずだよ」という承認が伝わります。子どもの自信を失わすことなく、子どもは本当の自分ではないから改善しなければならぬという意識をもつことができます。

「今日も遅刻しちゃったんだね。先生は君らしくないと思うな」と叱ってください。現在の自分の状況と、本来になりたい自分のギャップに気づくことで改善したいという意欲につながります。

【参考文献】

神谷和安著 『教師のほめ方叱り方コーチング』(学陽書房)

(愛知県刈谷市立かりがね小学校)